

# 視覚障害当事者による点字触読指導

—初めての試みから見えてきたもの—

佐藤 洋子（財団法人 中部盲導犬協会盲導犬総合訓練センター）

坂部 司（財団法人 中部盲導犬協会盲導犬総合訓練センター）

## 1. はじめに

当センターでは平成21年9月に、NPO法人愛知視覚障害者援護促進協議会と連携し、「TDLルーム」を開設した。TDLルームは中途視覚障害者が日常生活をより快適に、かつ、安全に送るための「技術」を、ボランティアの方の協力のもとで各自のペースとニーズに応じて楽しく学び、多くの仲間と情報を分かち合う場である。今回は、平成22年7月から開始した点字触読訓練を紹介し、視覚障害当事者による指導について考えてみたい。

## 2. 点字触読訓練の目的

TDLルームでは、点字はQOLを向上させる1つの手段であるため、自分の生活のニーズに合った点字触読の技術を身につけることを目的とした。盲学校受験、点字を駆使しての就労希望者には、より専門的な訓練を受けることができる施設（名古屋市総合リハビリテーションセンター、名古屋盲人情報文化センターなど）を紹介している。

## 3. 当センターにおける点字触読指導

### 1) 訓練生のプロフィール

訓練生	N	S	I
年齢	69	67	65
職業	主婦	主婦	主婦
居住地	土岐市	名古屋市	名古屋市
等級	1	1	2
眼疾	RP	RP	RP

使用教材	TDL点字訓練用教材	TDL点字訓練用教材	TDL点字訓練用教材
訓練目標	メモや手紙を点字でスムーズに読み書きする	読み速度を速くする	エレベーターや券売機の点字表示を読めるようにする

### 2) 教材

「五十音順方式」ではなく、「あ・い・に・な方式」を使用している。触知覚が標準点字サイズに慣れていない訓練生には「L点字」を使用している。また、点字の配列や形を理解させるために、**写真1**のようなカード型（タテ12cm×ヨコ8cm、立体コピー）を作成し、理解度を確認している。触読法は、少し指を立ててマスの中を1段ずつ上から下に垂直に触る方法を指導している。指導の参考にしたのは（1）月刊『視覚障害—その研究と情報—』第270号（2）『中途視覚障害者への点字触読指導マニュアル』（読書工房・2004年）澤田真弓、原田良實編著

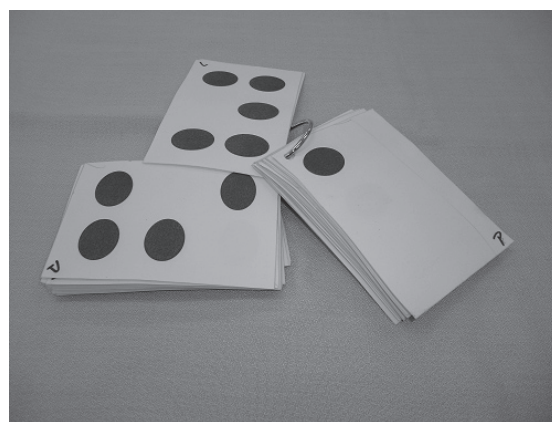


写真1 カード型（タテ12cm×ヨコ8cm、立体コピー）

### 3) 指導者プロフィール

1977 年生まれ。先天性の網膜色素変性症のため幼少期より強度の弱視。視力の低下に伴い 1996 年 3 月に名古屋市総合リハビリテーションセンター視覚支援課（旧視覚指導課）にて、点字触読訓練を受ける。日常生活で読み書きの手段として点字を用いているが、触読の「指導」を行った経験は TDL ルーム開設までではない。

### 4) 指導上の留意点

- (1) 一人の訓練生に一人の指導者が対応する。
- (2) **写真 2**のように、訓練生の指の動きを把握するために、幅の広いテーブルに向かい合って座る。



写真 2 幅広のテーブルに向かい合って座る

- (3) 状況把握のために、訓練生の声をよく聞く。
- (4) チェックポイント（特に注意を促す場面として 7 項目ある）
  - ① 訓練生がテーブルに対して、水平に座っているか。
  - ② 訓練生の姿勢が必要以上に前屈みになっていないか。
  - ③ 読む教材がテーブルと訓練生に対して、水平に置かれているか。
  - ④ 訓練生の指が行・マスに対して、まっすぐに置かれているか。
  - ⑤ 訓練生の指が確実に 1 マスずつ右に動いているか。
  - ⑥ 訓練生の指が 1 マスの隅々までを確実に触り、垂直に上下に動いているか。
  - ⑦ 訓練生の指が行をたどるときに、確実にその行をつかまえているか。

### 5) 課題

- (1) 訓練生の顔の表情や手や指の細かな動き

を眼で認識することができず、適切な時に適切な声かけをすることが難しい。

- (2) 訓練生の様子を知るために声をかけたり、訓練生の指に触れたりすることが、学習の妨げになってしまう可能性がある。

上記のことから平成 22 年度日本盲人社会福祉施設協議会リハビリテーション部会施設職員研修会、名古屋盲人情報文化センターの点字触読訓練の見学を行った。指導者が訓練生の様子を正しく、即座に把握することができないときもあるが、指導法として次の 2 つに注意している。

- ① **写真 3・4**のように、訓練生の指の 1 ～ 1.5 マス先に指導者の指を置き、訓練生の指が軽く接するようにする。

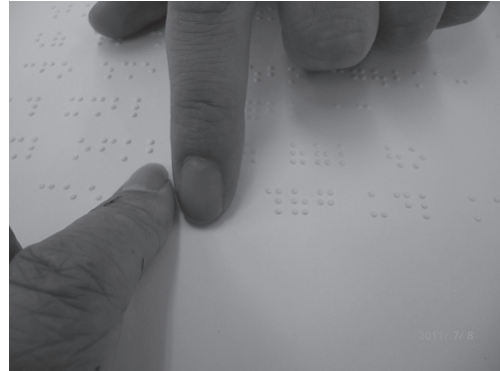


写真 3 訓練生の指の 1 ～ 1.5 マス先に指導者の指を置く

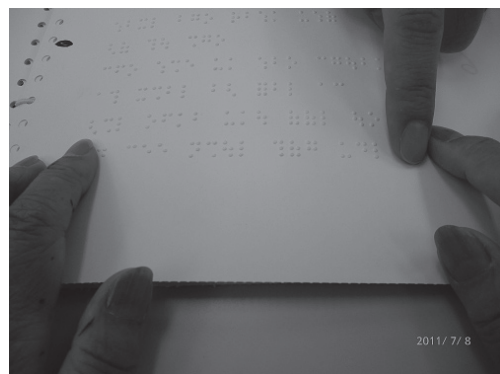


写真 4 訓練生の指の 1 ～ 1.5 マス先に指導者の指を置く

- ② 点字の形が記憶として定着しているかを確認するには、**写真 5**のように、訓練生にこぶしで机の上に点を置いて字の形を作らせ、指導者はその手に軽く触れる。



写真5 訓練生のこぶしを指導者が上から触れる

## 4. 点字触読指導の結果と対策 (事例：Iさんの場合)

### 1) 結果

- ①平成23年1月末指導開始、週1回、計18回、継続中
- ②指導開始前は町で点字の表示を見ても、「何かボツボツしたものがあるなあ」という印象を受けていた。
- ③今では点字がマスの中の決められた6つの場所にある点と空白の組み合わせであることを理解した。
- ④記憶の混乱や多少の誤読はあるものの、五十音のうち29文字の形を記憶し、触読によって識別できるようになった。
- ⑤体調（ひどい肩こりと頭痛、指先のしびれ）が良ければ、垂直に並んだ点の多い文字（み、になど）はスムーズに読み取ることができ、左右に点が散らばった複雑な文字（た、きなど）でも、スムーズに読み取ることができるようになった。
- ⑥エレベーターのボタンの表示のうち、「うえ」と「した」が触読できる。

### 2) 対策

- ①指導時間以外の場で、まとまった時間を予

習・復習のためにとることが難しい。

⇒名前をL点字、標準点字両方で書いたラベルをつくり、普段持ち歩くものに貼って、少しの時間でも触ることを習慣つけた。

- ②気候と体調によって指先の触知覚が大きく左右される。

⇒訓練中には2行読み終わるごとに休憩を入れて、蓄積した疲労によって訓練の能力が下がらないようにした。

- ③誰でも経験のあることで陥りやすいことではあるが、覚えた文字が増えるに従い、鏡文字の関係にある文字（つ、けなど）に記憶の混乱が見られた。

⇒記憶を確実に定着させるためには、何よりも読む経験を重ねることが必要なので、Iさんを追い詰めないように留意し、今の訓練を続けている。

## 5. まとめと結論

視覚障害当事者による点字触読指導は可能である。視覚障害当事者が指導を行うことの利点として、点字を「眼で見て読む」と「指で触って読む」ことは全く別のことである。中途視覚障害者特に高齢の者には、決して安易な道ではない。指導者の経験と指導法の学習の範囲内で訓練生に共感し、つまづきに対して、その原因を的確に判断し、間違いに対して修正が出来るように生きた助言をすることができる。

ただし、場合によっては晴眼者に訓練生・指導者双方の指の動きのチェックとフィードバックを受けることが必要である。訓練生の協力を得ながら「指導者の側の訓練」を積むことで、TDL ルームでは今後、より質の高い触読指導を提供できる。